2017.12.19

博物館 Dictionary No.202

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館1F−5（金工）の「梵音具」に展示されている作品について勉強してみよう。

梵音具―鳴らす仏具

京都にはたくさんのお寺がありますね。その多くでは、たたいたり振ったりして音を出すさまざまな仏具が使われているのを知っていますか？すぐに思い浮かぶのは、除夜の鐘でもおなじみの「つり鐘」でしょうか。こうした鳴らす仏具を、学問の用語で「梵音具」といいます。少々難しいですが「梵」とは仏教にかかわる言葉の頭につけられる字で、例えば「梵刹」とはお寺、「梵鐘」とはお寺のつり鐘のことです。梵音具は仏教が生まれた古代インドでは「カンチ」と呼ばれていたようで、漢字では「犍稚」と書きます。現在でも梵音具のことを犍稚物と呼ぶことがあります。

図１　銅鰐口（江戸時代　京都国立博物館蔵）

では梵音具はいつ何のために使うのでしょうか。仏教では、お坊さんが毎日おこなう勤行や、特別なご法要などの儀式の中で、進行の区切りをつけたりリズムをとったりするため、その時どきによっていろいろな梵音具が使われます。またお寺の中や周りで、お坊さんや信者さんに時間や行動の節目を知らせる役目もあります。その多くは、楽器のように音階を連ねるのではなく、「カーン」とか「チーン」のような、響きをもった単音かその連続音です。ですので澄んだ音が長く響くように、形は円形あるいは左右対称形で、材質も青銅（銅に少量の錫と鉛を混ぜた合金）などの金属製が多く、また物によっては固い木が用いられたりします。中国の元時代１４世紀に書かれた禅宗の書物『勅修百丈清規』には、「古代インドの犍稚は焼き物・木・銅・鉄の発する音」と書かれています。この澄んだ音の響きが、仏のおわす空間の雰囲気を清らかで厳かなものにするのです。梵音具にはたいへんたくさんの種類がありますが、その中から鰐口・磬・錫杖をご紹介します。

図２　軒先高くかかる鰐口

図３　磬と磬架（東京国立博物館蔵）

鰐口は字の示す通り、下半分が鰐のように大きく口を開いていることからこう呼ばれます。ちょうど回転焼（今川焼？）のような形ですが中は空洞です（図１）。上の２か所に耳を付け、ここから紐を通して吊り下げます。もっとも古い作品は、平安時代の長保３年（１００１）年の元号が記されたもの（東京国立博物館蔵）で、それ以後も数多く作られました。そのほとんどは青銅製で、ごくわずかに鉄製のものもあります。軒先の高いところに吊るされた鰐口を見たり鳴らしたりした人もいるでしょう（図２）。鰐口の下に下がった綱を振って打ち鳴らします。この綱の振り方にコツがいるのですが、うまく中心にヒットさせればきれいな音が響くはずです。

磬はご法要など儀式の中でお坊さんが打ち鳴らすもので、磬架という枠につるして鳴らします（図３）。多くはやはり青銅製で、平べったい左右対称の山形をしていますが、蓮華形のものもあります。もともとは古代中国の楽器で、漢字のつくりが示すように石で作られ、大きさの違うものをつるして鳴らし音階を出したようです。古いものでは奈良時代８世紀の作品があり、以後も数多く作られました。今もお寺の堂内に置かれ現役に使用されているのをよく見ます。このあたりは鰐口と同じですが、鰐口と違い磬は私たちが普通に鳴らせるものではありませんね。

最後に錫杖。巡礼するお遍路さんたちが、先っぽにシャンシャンと音を立てる丸い金具のついた杖を持っていることがあります。この杖が錫杖で、特に先端の金具部分のみを錫杖頭といいます。錫杖はお坊さんが持つべき道具とされてきたことから「僧具」の一種なのですが、儀式の中で鳴らされることもあるので梵音具ともいえ、国の「国宝・重要文化財」では梵音具に分類されています。材質はやはり青銅製が多く、振ると遊鐶と呼ばれるリングが本体とぶつかり音を出します。正倉院には奈良時代８世紀の錫杖があり、平安～鎌倉時代には鳴らすのがもったいないような、装飾の豊かな作品も作られました（図４）。

図４　重要文化財　金銅錫杖頭
（鎌倉時代　京都国立博物館蔵）

企画室長　伊藤信二

印刷・富士印刷社